

## 夏を見上げて。(あさのあつこ)

伊藤 直毅、小幡 千尋、岡崎 隆祥、表 里美、梶 隼一郎

## 一 作者と作品について

あさのあつこ(本名、浅野敦子)は『バッテリー』『The MAN ZAI』『弥勒の月』などの著作がある。岡山県英田郡美作町湯郷(現・美作市)出身。父は税務署員、母は高校教師。幼児から小学生まで、母方の祖母に姉弟3人ともに世話される。祖母の影響で漫画ファンとなり、漫画家を志望するも、十二歳で絵の才能が無くあきらめる。その後、中学二・三年のころから、作家を志す。

作家としてのきっかけをつかむため東京の文学部に進学。卒業後、岡山市で小学校の臨時教諭を二年間務める。学校教員ならまとまった休暇を執筆に当てられると思つてのことでもあった。

三十六歳で、大学時代に指導を受けた作家で主宰の後藤竜二に誘われ、日本同人協会「季節風」同人となる。「季節風」に連載した『ほたる館物語』が認められ出版され三十七歳で作家デビュー。一九九七年『バッテリー』で野間児童文芸賞を受賞。幅広い世代の支持を得て児童文学としては異例の一〇〇〇万部のベストセラーになる。一九九九年『バッテリー2』で日本児童文学者協会賞を受賞。二〇〇五年『バッテリー』全3巻で小学館児童出版文化賞を受賞。

二〇一〇年七月「季節風」代表の後藤竜二の急逝に伴い、後継の代表に選任と総会で承認される。二年間の任期後再任され、継続中。

「夏を見上げて。」は、単行本『十二

歳の文学』からの出典。この『十二歳の文学』は、第一回十二歳の文学大賞の上位受賞者の作品と当代を代表するクリエイターによる作品がコラボレーションするという企画で出版されたもの。『夏を見上げて。』は、そのための書き下ろし作品である。

## 二 叙述について

道に水たまりができていた。

この文の情景から回想が始まり、「怖いから震えちゃうんだ。それつてしようがないだろう。」に再び現在の時間に戻り描写が続いていく。「水たまりができていた」ということは、今は雨は降っていない。雨が止んでいるということから、話の転換が示唆されている。また、雷の場面は時系列的には少し前の回想の場面だということが分かる。

夜の雷なんて身震いするほどに恐ろしい。

「なんて」は、雷が苦手という表現を受けて、雷の中でも夜の雷が



一番恐ろしいというニュアンスを加えている。「身震い」とは、恐ろしいことに対して、体が自然と震える、ということである。一は雷に対して、条件反射的に震えてしまうということが読み取れる。

家も、庭も、町も、神社の森も、一自身もこなごなに砕けてしまうんじゃないかと、足が震える。

「…じゃないか」という言い方から、実際にそのことが起こる恐怖を感じているのではなく、雷という恐怖のイメージから自分の周りや自分自身が砕けるという比喩が使われている。「こなごなに」という言葉からも、雷に対する恐怖をより強く感じることができると言える。

給食の時間ぐらいいまではからりと晴れて、真っ青な空だったのに、西の方から濃い灰色の雲が押し寄せて、あつというまに青空を覆ってしまった。

「ぐらいいまで」とあり、からりと晴れていた空を見た最後の記憶が給食の時間で、そのあといつまでからりと晴れていたのか定かではないことがわかる。また、この文の直前に「六時間目が始まった頃から急に空が黒くなり始めた。」とあるので、青が印象的だった空の色が急激に変化した様子が分かる。「からりと」は、空気に湿気がなく、雨を予想させない天気であったことを表している。「真っ青な空」「濃い灰色の雲」と、色が対比させてあり、後に続く「押し寄せて」から、青い空が灰色の雲に浸食されていく様子がうかがえる。「覆ってしまった」とあり、空が曇ったことを良く思わない気持ちを感じられる。

耳をつんざく雷鳴がして、明かりが消えた。

明かりが消えると、光までも見えてしまい、夜と似た環境ができてしまうということになる。それは一にとつて、「身震いするほど恐ろしい」ことであり、「つんざく」（勢いよく突き破る）といった表現からも一の体験している恐怖が伝わってくる。

お調子者の直人が両手を上げて、踊るまねをする。

勇平は小さいころから柔道を習っていて、体も声も性格もどつしりとしている。

直人は、一文前で雷が鳴り、女の子たちが怖がっているのを見て、はやしたて、おもしろがる。勇平は「体も声も性格もどつしりとしている」というところからも分かるように、落ち着いていて、雷には動じていない。周りに対して、おもしろがる直人と、雷に動じない勇平は、対照的であるが、どちらも雷のことを怖がっていないという点では共通している。

一は肩をすくめ、勇平に向かって、しょうがないよなというふうに笑ってみせた。

「肩をすくめ」という表現は、一が雷に怯えていることもあり、勇平に対して大きな態度を取れないことを示している。「しょうがないよな」という表現は、雷で大騒ぎしているクラスメイトに対してのものである。ただしここでは、勇平に調子を合わせただけであるとも考えられる。「笑った」ではなく、「笑ってみせた」とあり無理矢理笑っている。

直人や勇平たちの前でみつももなく、騒ぐことも、しゃがみ込むことも

できない。

「みつともない」はここでは雷を怖がるのが「格好悪い」ということを表しており、女子のように悲鳴をあげたい気持ちも、家で布団にくるまる代わりにしゃがみ込みたい気持ちもあるが、その両方が「みつともない」ことだと思っっている。

だからと言って、威張っているわけでもないし、自慢をするわけでもない。

勉強もスポーツも得意な自分のことについて言っている文であるので、「だからといって」は、自分がすごいと認めたくなくて、「そういう人はよく威張るし、自慢したがるものだ」という考えがあることが見て取れる。よって、自分はあえて威張っていないことや自慢しないことを主張し「自分はそんなことをしない人間だ」と、結果的に自分をほめていることが分かる。

一なりにがんばってもきた。

「も」がついていることから、いつも一番の一も才能だけで認められてきたわけではなく、一自身が努力し、勝ち得たものだという主張が強く表現されている。そのため、一が自分の「努力」を認めてほしいという心情が読み取れる。

その一が、雷が苦手で、雷鳴を聞くたびに泣きそうになるなんて、絶対に知られてはならない。

「なんて」はマイナスイメージの表現であり、一にとって「泣きそうになる」ということがありえないこと、考えたくもないことである

ということが読み取れる。また、「なんて」は、プラスイメージの「その」と対応しており、さらに「そんな」ではなく、「その」と表現していることから、一は『自分はこういう人間だ。こうあるべき人間だ』という強い意識を持っていることがわかる。このことは文末の「ならない」という表現からも読み取ることができる。「絶対に」はこれを強調している。

「たびに」から、「雷が苦手で」という表現を補足する意味合いを読み取ることができる。

一は唇をかみ、心の中で、一秒でも早く雷が遠ざかりますようにと祈っていた。

「唇をかむ」の辞書的な意味は、怒りやくやしさをこらえる、という時に使用する言葉である。ここでは、恐れ・それからくる震えをこらえていえる。また、「思う」ではなく、「祈る」という言葉を使っていることから、一の切実な思いが読み取れる。

すごく親しいってわけではないけれど一は恵介のことがわりに好きだった。

恵介のことは好きであるが「すごく親しいってわけではない」と、あえて「すごく」を使ったうえで否定しているので、一は恵介のことを比較的親しいと思っっている。

「わりに」は、「普通より少し」というような意味で、割合的には六割くらいではないだろうか。

ちよっと胸がわくわくするような物語を聞くのが楽しみでたまらな

った頃があった。

「胸がわくわくする」に「ちよっと」をつけ、「楽しみ」を「楽しみでたまらなかつた」として、恵介が語る物語の小さな「わくわく」を、本当に楽しみにしていたことが分かる。また、「頃があった」が「たまらなかつた」とともに過去の記述であるので、過去の自分はいつも「楽しみ」にしていたことと、今はそうではないというニュアンスが読み取れる。

そんなわくわくを、すっかり忘れていた。

「そんなわくわく」とは、恵介の作る物語を聞いた時に感じるものである。「忘れていた」だけではなく、「すっかり」という副詞がついていることによって、完全に忘れていたという意味が強くなっている。

「あ……うん、そうだな、かつこ悪いな。」

「あ……うん」という表現から、恵介と自分を重ね合わせて物思いにふけっている様子が読み取れる。二つの「な」から、勇平の言葉に対する同意を示しているようだが、自分の中でまだ考えているような雰囲気は伝わってくる。つまり、勇平の言葉におうむ返しをしただけで一の意味はない。

「そうかなあ。おれ、雷が大の苦手なんだ。まじで怖いもの。怖いから、どうしても震えちやうんだ、それってしょうがないだろ。」

「しょうがない」という言葉から、自分の苦手の一つと認識し、自分をありのままに受け入れている。また、「かつこ悪い」と言われたのに対して、「そうかなあ」と返していることから、苦手があることが、

周りからばかにされることに対し、疑問を感じている。一は、この言葉が「さらり」と言えないために、周りの目を気にして、苦しんでいる。

恵介の顔がゆがんだ。

「ゆがんだ」という表現から、泣きそうになるのを堪えようとしている様子がわかる。

恵介のようにさらりと言えたら、みんなの前で堂々と震えることができたら、どんなにせいせいするだろう。

「恵介のように」の「ように」は願望の「ように」だと考えられる。「さらり」や「堂々」などとプラスイメージの言葉を使っていることから恵介を良い意味で見ている。「せいせい」「清々」だと考えられる）とあることから、一は、雷が苦手だと、知られてはいけないと思っていることに関して、自分自身がかなりのストレスを感じており、認めてしまえば、気持ちがすっきりすると考えている。

でも、今日は、恵介の言葉が耳にこびりついていて。

「でも」という接続詞は、前文の「いつもなら、そのまま通り過ぎたであろう」という一文を受けてのものである。「恵介の言葉」とは、「怖いから、どうしても震えちやうんだ。それってしょうがないだろ」というものである。「残っていた」ではなく、「こびりついていて」となっていることから、まったく離れないというニュアンスが含まれている。また、忘れようとしてもそれができないということから、少しの不快感を感じることができている。

のんびりした返事が頭上から降ってきた。

返事が「降ってきた」ことから、一には予想外の方向から返事があつたということが読み取れる。また、同級生にからかわれた後にも関わらず恵介が「のんびりした」調子で返したことから、一に対して身構えていないことが見てとれる。

「そうさ。一ちゃんも来いよ」

「ちゃん」付けで呼んでいることから、恵介は昔から変わらず一のことを親しい友人だと思っていることがわかる。

夕立に洗われた家も田畑も山々もみずみずしく輝き、美しかった。

この叙述があることから、夕立によつてもたらされた町の美しさに一が気付いていることがわかる。また、この表現が一の心情を暗示しているのではないかと考える。「夕立にあらわれて」という表現から、夕立による一連の出来事を受けて、一の価値観に変化が現れたこと、さらに、「みずみずしく」という表現から、一の心が満たされている様子が見えてくる。

「ここ、最高の場所なんだ。嫌なことがあると、ここに来てこの風景を見るとすつとするんだよな。」

「するんだ」に「よ」と「な」がついていることから、すつとすることを一に対して呼びかけていることと、それを自分へも再度確認していることがわかる。

「ほんとに？」

恵介の素直な性格を考慮すると、恵介を褒める一の言葉を疑っているというよりは、期待の気持ちをごまかすための発言であると思う。つまり、一なら自分の作文をわかってくれるのではないかという心情である。恵介が一へ寄せる信頼の大きさがわかる。

自分のことを笑われたようで、つらくて逃げただけだ。

「笑われたようで」とあるので、実際に笑われているのではない。「だけ」という表現から恵介が思っているような意図はないということが読み取れる。「だ」と断定しているところからも、一の思いが伝わってくる。

楽しい物語に出会ったときみたいだった。

「楽しい物語に出会ったようだった」としないことから、物語に出会ったのではなく、「楽しい物語を読んだ」その瞬間に出会えたということと言いたいのだろう。

「うん、ほんとにそう思う。あの……俺さ、また恵介の作った話、聞きたいって思うこと……あるし。」

「……」が多いことから、一は言葉をなめらかに繋いでいないことがわかる。プライドの高い一であるので、普段はあまり話をしない恵介を褒めることに抵抗があるのではないだろうか。

「苦手がいっぱい。でも、得意もちょっぴり。」

どちらも七音でリズムがいい。この言葉を一が何度も繰り返し返していることから、一がこの言葉を気に入ったことが読み取れる。このよう

な個所からも、恵介の文章や言葉をうまく表現する才能というものが見て取れる。

「なんだか、おかしかった。」

「なんだか」から、一自身もなぜそれがおかしいと思うかの理由が明確でないことがわかる。

一は、自分が少し大きくなったような気がした。

「大きくなった」とあるが、実際に大きくなったわけではない。今まで他人の評価を気にして小さくなっていった自分と対比して、大きくなったと表現されているのではないだろうか。また、「気がした」は「思った」よりもそれが感覚的なものであることから、その成長を自分で感じる事ができていると読み取ることができる。「少し」とあることから、その成長を自分の中では、小さなものであると感じていることが読み取れる。

### 三 考察

#### (一) 一の心情の移り変わりについて

##### 1. 周囲の評価を過剰に意識

【場面】六時間目の授業

○苦手な雷↓じっと我慢

- ・そんなことをしたら、藤城一のイメージが台無しになってしまう。
- ・神谷小学校六年生の誰よりも、目立つ存在なのだ。

##### 2. 今までの自分に疑いを持つ（しんどさを覚える）

【場面】恵介とのやりとり

- 友人にかかわられていて恵介↓自分のことを言われているよう
- ・弱虫、弱虫と自分のことをからかわれているような気がしたのだ。

##### 3. 恵介への憧れ・葛藤

【場面】塾への道

- 恵介の言葉を思い出す↓自分もあんな風に言いたい。
- ・恵介のようにさらりと言えたら、みんなの前で堂々と震えることが出来たら、どんなにせいせいするだろう。
- ・どんなにせいせいするだろう。でも……やっぱり、言えない。

##### 4. 新しい自分との出会い

【場面】神社

- 自分の町の知らない景色↓新しい自分との出会いの暗示
- ・「苦手がいっぱい。でも、得意もちょっぴり。」
- ・一は、自分が少し大きくなったような気がした。

以上でまとめたように、この『夏を見上げて』のテーマは、雷とそれに対する恵介の言動によって、一が今まで受け入れられなかった価値観が、もたらされるといえるものである。このことで、一も少しだけ肩の力を抜いて生活ができるようになったと考える。ただ、この出来事以来、一の行動が大きく変わったとは考えにくく、あくまでも、藤城一のイメージはしっかりと守るといえることは継続されていくと考える。

## (二) 恵介の得意なことについて

この物語はひとことで言うところ、一の成長の物語である。その成長に大きく関わってくるのが、幼馴染の恵介の存在だろう。彼はクラス（もはや小学校）においてもっとも目立つ一対極の位置にいる少年であり、その外見からあだ名はマツチ棒、同級生にからかわれても反撃をしない、おとなしい性格である。本文中の仕草や口調からも、素直で温厚な性格が見て取れる。また、恵介の発言に「苦手がいつばい、でも、得意もちよっぴり」とあることから、彼は一のように得意なことが多いとは言えないこともわかる。本文中で書かれている彼の得意なことと言えば、「作文」「物語をつくる」ことであり、現実離れたファンタジックな内容の物語や、自分の街の美しさを題材にした作文を書くことから、恵介のやわらかな感性や美意識がうかがえる。しかし、それを示すだけならば、彼の得意なことが「作文」「物語をつくる」ことである必要性は低い。例えば、写真を撮ることであったり、音楽が得意であったりでもいいだろう。なぜ作者はわざわざ恵介の「得意なこと」を作文や作話にしたのか。

作文や作話は、先ほど例に出した写真や音楽と同じ、芸術だと言える。芸術の一要素として、自らの内面を表現するものであることが挙げられる。ただ、他の芸術との明確な違いとして、その表現に言語を使うことができる。作文や作話が得意だということは、物事について一度熟考し、その自らの考えを人に伝わるかたちにして言語によって表現ができることをあらわす。

本文中に、『怖いから震えちゃうんだ。それってしょうがないだろ。』という表現がある。これは、恵介の素直な性格によって出てきた直感

的・感想的な発言だと取ることもできる。しかし、ここで恵介の「得意なこと」が作文・作話である一面も考慮すると、この発言は雷が怖いことに対して一度きちんと考えてからのものだと取れるだろう。ここから、恵介がただ素直にものをいうだけの人物ではなく、一度熟考してから発言することができる人物であるということが読み取れる。このように、作者が彼の「得意なこと」を作文・作話にしたのは、本文に書かれた仕草や発言だけでは見えてこない、恵介のもう一面を提示するためではないかと考えた。

## (三) 教材として考える「夏を見上げて。」

この教材の特徴的な点は、「会話文以外も語り手は主人公の藤城一である」ことだと考える。本文の特に中盤からは、「今、塾への道をゆっくり歩きながら、考えていた。」や、「眼下に町の風景が広がる。」など、一が主語である文のほとんどに「一は」という記述がなく、結果的に読者は、自分のことを非常に客観視した見方をする主人公の像を感じ取る。「夏を見上げて」は、中学二年生の教材であるが、にもかかわらず、主人公は小学六年生である。よって、一が小学生にしては少し大人びた少年であり、思春期にさしかかろうとしているという設定が考えられる。

さて、授業の教材として扱うにあたっての授業展開について提案、考察する。

第一次の活動は本文を通しての一の心境の変化を考察することであるだろう。本文を読み進めながら、雷が怖いことを隠して自分のイメージを守ろうとしていた一の気持ちや、雷が怖くて震えていたことをからかわれた恵介の「それってしょうがないだろ」という言葉によつ

て変わっていったことについて、一通りの流れを読み解く。そうして第二次だが、今回この教材内容論で行ってきた、本文の部分の詳細な読み取りを行いたい。一が語り手として描いてあるこの本文には、会話文以外の文にも一の心情が影響している記述が多い。叙述でいくつか述べたように「ちよっと胸がわくわくするような物語を聞くのが楽しみでたまらなかつた頃があつた。」などにあるような、一が自分で自分の気持ちについて述べつつ、言葉を曖昧にしているような箇所がいくつもある。本文全体を通しての一の心境の変化だけを追っているのは見過ごしてしまう心情が、文ひとつひとつを考察することによって鮮明に見え、より深くこの教材を読み解くことができる。この活動は、本文を二つに分け、二回に分けて前半と後半にしぼって班ごとで一文を抜き出し考察し、発表する。発表と意見交換の後もう一度班で見直す活動を展開すると、より文に対しての深まりが得られると考える。その後第三次に、一時間目に行った全体の考察と二次で行った細かい考察をふまえ、一の人物像の整理と改めての考察をおこない、まとめとする授業が考えられる。

